

「ファウヌスの家」の《鶏を襲う猫、鴨、魚介のモザイク》——古代ローマの静物画に関する一考察——

野々瀬 真理(東北大学)

---

ポンペイで最大規模の敷地面積を誇る「ファウヌスの家」には、第一様式(前二世紀後半)の壁画と床面のモザイク装飾が残されていた。特にモザイクは、《アレクサンドロス・モザイク》をはじめ、当時の壮麗なデザインを留めている作品の数々が発見されている。本発表では、この家の翼室(アーラ)に設置されていた《鶏を襲う猫、鴨、魚介のモザイク》(以下、《猫モザイク》と略)に注目し、台所の食材を表した静物画のジャンルがどのように発展していったかを考察する。

《猫モザイク》は上下二段に分かれ、上段には鶏を襲う猫、下段には魚介、4匹の小鳥、ハスを啜えた2匹のカモが描かれている。このうち「ハスを啜えたカモ」や小鳥については、ナイル河の風景を表した「ナイル・モザイク」と呼ばれるモザイク・ジャンルからのモチーフの引用が指摘されており、そのモデルはアレクサンドリアの工房で成立したと考えられている(Meyboom 1995)。また魚介に関しては、「ファウヌスの家」のトリクリニウムにも見られる《伊勢エビとタコの戦い》のモザイク、鶏を襲う猫に関しては類似した彫刻の作例が指摘されている(Westgate 2000)。だがこうした先行研究は、それぞれの作例でどのようなモチーフが共通しているかを考察するのみだった。したがって、《猫モザイク》を構成する要素ひとつひとつに、どのような意味が込められているかの解釈は充分に行われていない。そして、それらの要素がなぜひとつのモザイクとしてまとめられたのかについても触れられてこなかった。また、《猫モザイク》の類似作品が、ポンペイで4点、ローマで1点、アンプリアス(スペイン)で1点出土しているが、これらの作例のあいだの差異についても、細かな検討はされていない。

本発表では、《猫モザイク》に登場する「鶏を襲う猫」、「魚介類」、「ハスを啜えたカモ」のモチーフを個別に観察し、主にヴェスヴィオ山近郊で出土した静物画(クセニア画)におけるそれぞれの食材の描かれ方と比較する。特にカモが、本作品においては「ハスを啜える」というナイル河風景表象のモチーフを維持したまま、古代世界における台所の情景というまったく別の主題に転用されたことに注目し、《猫モザイク》のパッチワーク的な性格を浮き彫りにする。それとともに、この主題が以降の時代に変更を加えられながらコピーされ、宴会を行う空間にふさわしい室内装飾として受容されていった過程を明らかにする。